山西省の古塔

――中国仏教文物に関する調査報告――

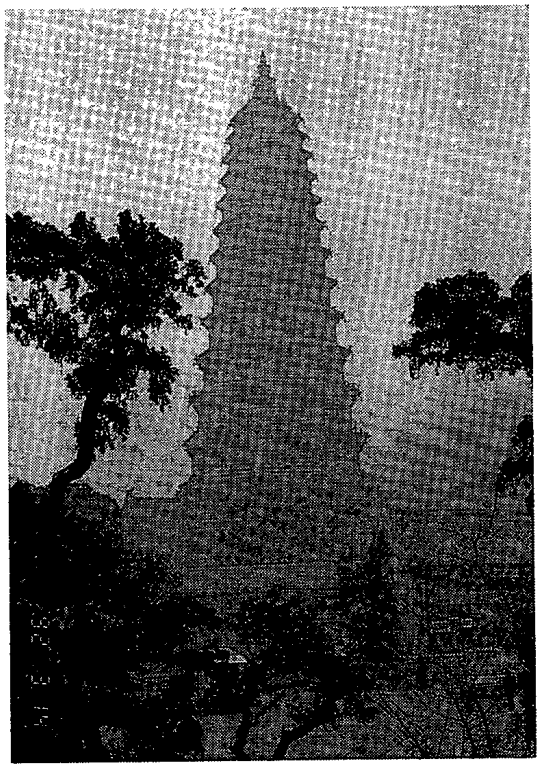
岡島秀隆

一、洪洞県（広勝寺・飛虹塔）

県城東北十七キロ米、霍山南麓に広勝寺があり、その歴史ははるかに一千八百年をさかのぼることができる。「釈力空法師」の『広勝志』に載せられる順治十六年の「縁起碑」に引かれるところによれば、南北朝期の北周武帝保定三年（五六三）に遊僧「正覚（法江和尚）」がこの寺に仏塔を興建せんとした時に発見した断碑には「東漢桓帝建和元年敕建倶盧舎寺」と記されていたという。また『平陽府志』にはこれをうけて「寺始建于東漢建和元年（一四七）、原名阿育王塔院、亦称倶盧舎寺」とあるという。創建時の東漢末期は世の中が乱れ、人々の生活はおびやかされていたようで、精神的安慰を求め、あるいは朝廷の使役を避けて仏門に帰依する者が多かったとみえ、寺院の僧侶も日毎に増えたため逐次規模を拡大していったようである。その後相継ぐ法難により寺院仏塔は頽廃したのである。唐代には一時再建されるが、たびたび盛衰をくり返し、金宣宗完顔珣の貞祐年間（一二一三―一二一七）には兵火をあびて全寺倒壊し、元成宗大徳七年（一三〇三）には大地震によって多大の損失をうけたともいわれている。更に明代清代にも地震にあい破壊されている。それでも現在広勝寺は上院下院に分かれているが、上寺の塔と大雄宝殿が明代の重修重建をへている外は、他の建物には大方元代の建築様式が留められている。

山西省の古塔（岡島）

広勝上寺の山門をすぎると壮大華麗な仏塔がそびえている。その裏には阿弥陀殿、大雄宝殿、毘盧殿が列をなし、その両脇にも堂宇がある。この塔は昔阿育王が八万四千の塔を造ったといわれるうちで震旦にあるとされる十九塔のひとつともいわれるが、先の力空著『広勝志』に引用される宋慶暦七年（一〇四七）の『平陽広勝塔興建考』の記によれば、漢代に「慈山」という西域僧があり法号を「倶盧舎利」といったが、東漢本初元年（一四六）仲秋前夕に坐化したので、奉敕によって建塔したといい、古名「阿育王塔」、又呼んで「倶盧舎利塔」といったという。唐粛宗上元元年（七六〇）に重建している。「霍泉水神廟明応殿（下寺の西側）」に残る元代泰定元年の壁画には元代の広勝上寺塔の形象が描かれているが、八角十三層の塔形は檐（軒先）が短く、磚造の塔身には彫飾は施してないという。明の正徳年間（一五〇六―一五二一）に仏僧「達連大師」というかたが、この塔の損壊しているのを愁いて新修の誓願を立て、四方に募化し、かつ晋王の助けを得て正徳十年（一五一五）着工。十二年を経て嘉靖六年（一五二七）落成したが、達連大師は別に「飛虹」と号したことから、この後塔は「飛虹塔」と称されるようになったのである。達連大師は山西襄陵県（現襄汾県）柴村の出身で俗姓王。明成化三年（一四六七）生まれで幼くして出家している。架橋事業などに多くたずさわったといわれる。嘉靖十二年（一五三二）円寂、世寿六十二歳であったという。



飛虹塔

飛虹塔は八角十三層の楼閣多層磚塔である。塔高四十七・三一米。一層よりその径は徐々に縮小し、最上層では最下層の約三分の一程となる。従って全容は長大な錐形をなしている。外観で特筆すべき点をあげると第一に、塔底

層の周囲に回廊が設けられ（一六二二年増建）、いわゆる「裳層（モコシ）」があるので、軒がひとつ多くなって、あたかも十四層に見えることである。有名な応県仏宮寺の木塔もモコシをつけているが、それが檐柱に支えられているのに対してこの塔では檐柱内側に墻壁がある。軒上の八方隅は降棟と垂獣がみられ、軒先は反り上がっている。また第二に、底層南面に二層の木造楼閣式登上門（亀須座）が突出している点である。この屋頂の造りは手がこんでいて三角形の破風が東西南三方に向かって計五つ見られる。軒先は反り上がり各々の棟には脊獣、走獣等が賑かに並んでいる。さらに第三に塔刹の形態であるが、単に宝瓶というよりは、大きな覆鉢様の基部の上に輪蓋等を重ねたラマ式小塔の如きが正中にあり、その周囲にいっそう小さいラマ式塔が四座配置されている（金剛宝座塔様式）。細部装飾は実に技巧的である。最後に、塔身の素地は普通の磚造であるが、その表面を見事な五彩琉璃焼瓦で装飾している点である。各層各面にアーチ式の辟門乃至仏龕が開き、その周辺に五光十色の絢爛たる図案が壁面を埋めている。例えば、神竜、仏菩薩、人物、盤竜、鳥獣、草花（花卉）等、いづれもまるで生気あるもののようである。これらの各種浮彫懸塑の技巧はまさに超絶的といわざるを得ない。殊に下部三層までは精緻である。また各層軒下には、角柱、垂花柱などがあり、その上に上層基部の斗栱、蓮弁が巡っている。上層は見難いが一、二、四、六層は斗栱組で、三、五層などは蓮弁が積まれている。また、二層だけには高欄がみられ、神仏等の造像も一段と多い。軒隅には脊獣が見え、下に風鈴がゆれている。いずれも装飾は五彩琉璃焼である。

塔身内部では底層が最もすばらしい。二階入口には『広勝塔』とあり、それをくぐると大きな銅製釈迦坐像が衆目を圧倒する。人に聞くと天宮琉璃殿と称する。この像の両脇と前にも像があり、周囲には七つの仏龕が設けられている。眼を仏像の頭頂にあげると見事な「琉璃藻井（八角ドーム天井）」の細密な彫塑の天人、盤竜、そして楼閣、斗栱組などが幾重にもなって天上界を思わせる。釈迦像背後に上層へ通じる階梯があるが、狭くて一名ずつ登るのがやっとである。隠し階段のようで途中体軀を反転させないと足場が確保できないという特殊な構造を持っていておもしろい。二層には中央に六角基台に乗せられた白っぽいラマ

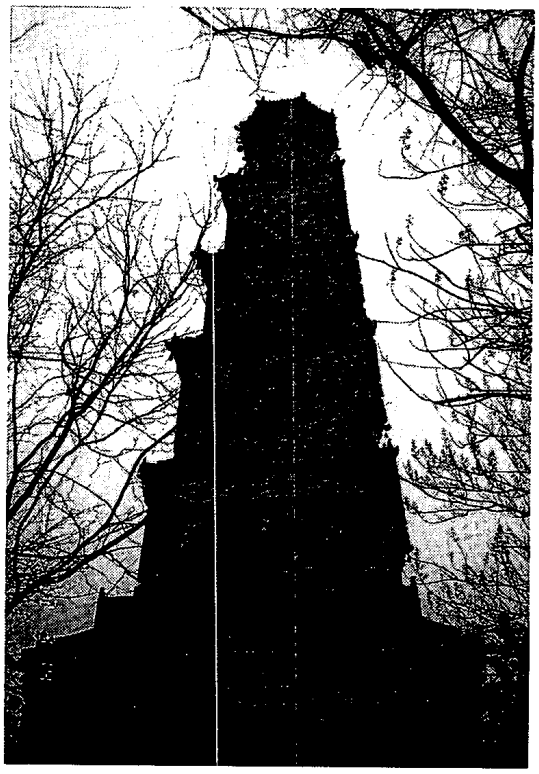
（『図像中国建築史』より）

式塔様のものがある。塔身下部の一方に門があり、磚を心にしている。相輪部は八層まで確認でき、各層は円形の軒のようで垂木と軒丸瓦らしきものが刻されている。いわれは解らない。三層は何もないが天井周辺に陶製蓮弁がみられる。四層は床が板ばり。それ以上は未登だが十層あたりまでは行けたようである。総じて底層がぬきん出て華麗であり、上層は秘密の空間だったように思われる。底層門道右上の壁に碑石あり。明代の重建碑である。飛虹塔の価値ははかり知れず、現在国家重点文物保護単位（国宝）である。

二、臨汾市（大雲寺・琉璃塔）

臨汾市城内西南端に俗名「鉄仏寺塔」と呼ばれる磚塔がある。塔の南隣は「山西師範大学小学校」、東南側には「臨汾市第一医院」があるらしい。門をくぐり中庭に出ると西方に塔頂がみえてくる。西方は空地であった。かなり広大な平地が存在していることから、かつてこの周りは大雲寺境内であったかとも思われるが、今は塔の他それらしきものは見あたらない。大雲寺の創建は唐の貞観年間（六二七－六四九）とされるが、清の康熙三十四年（一六九五）の地震で倒壊し、同五十四年に再建されたという。この塔の建立もこの時とされる。

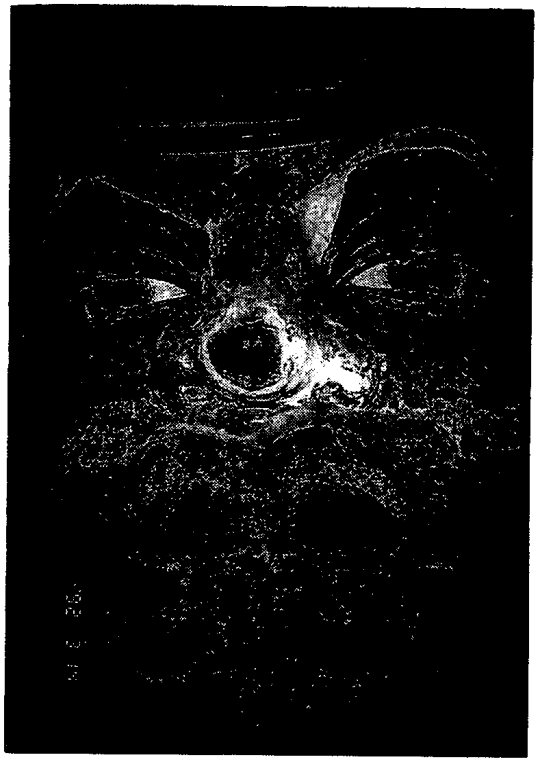
塔高は三十米余りで六層ある。底層から五層までは方形であるが、いずれも横幅が高さの二倍ほどある。また下層ほど規模は大きいが底層が特に大きく、四方の屋根も広い。しかもこの上にだけ高欄が設けてある。更に注目すべきは、第六層だけが八角柱形に造られていることである。外面装



瑠璃塔

飾を見ると、二層では東西壁面に三つの琉璃焼陶器でできた四角い飾り窓風のものが横列してはめ込まれ、それが南北面では左右端二つが上円下方のアーチ式、中二つが四角形の計四つある。また、軒下斗栱組は周囲等間隔に二十四組あり、その上に二軒の棰、四隅の隅木（風鈴がつく）が普通の磚で彫り出されている。ゆるやかに反り上がる屋根は琉璃瓦で葺かれている。三層から五層では、各面中心線上の上部に斗栱の見られる「門楣（まぐさ）」、下部にアーチ式はめ込み、左右に四角形のはめ込みがある。その全てが琉璃焼きである。各層軒下斗栱組は周囲十六組ずつある。屋根は二層同様琉璃瓦製である。第六層では基部に琉璃製の蓮弁らしきものが受け、各壁にはこれまた方形のはめ込みが一つずつ並ぶ。その上には易の「八封」が掘りぬかれている。この最上層の軒先に下がる風鐸は下層のものと異形で大きい。塔頂にも琉璃瓦が見え、その上に比較的小さな宝瓶が乗っている。この塔は八封の方位に基づいて作られ、図案も仏菩薩等六十四あるというが確認できなかった。

内部はというと、底層の東面にアーチ式の門が開き、



大雲寺仏頭

「原頭佛祖」の篇額がかかっている。中には正面を向いた生鉄鋳の仏頭が地面から顔を出していて一種異様な雰囲気をただよわしている。「鉄仏寺」といわれる所以であろう。像高六米、直径五米ときく。仏頭の眼鼻立ちははっきりしている。殊に唇は肉厚で、全体からしても豊満な造作をしている。これは唐代の作といわれる。塔形は総じて雑変期の異形の類型に入ると思われる。

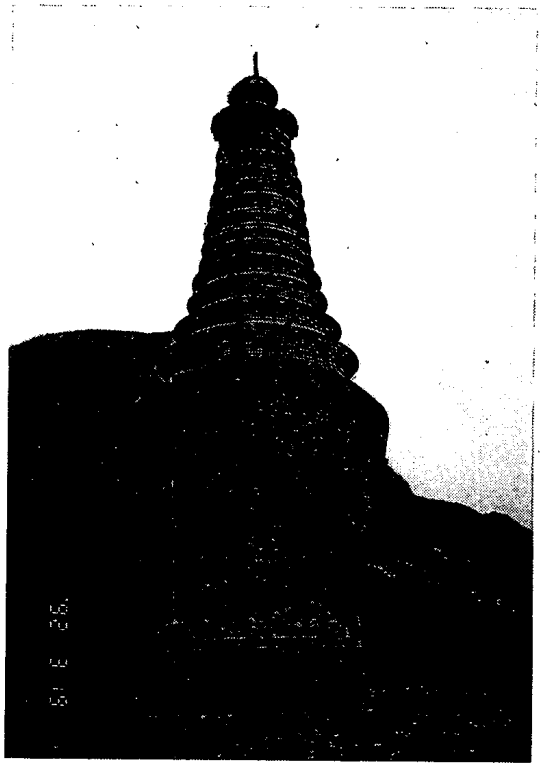
三、晋城市区（青蓮寺・ラマ塔、他）

山西省南方、河南省との省境近くに晋城市がある。その市区東南十七キロ米あたりの硤石山中腹に寺院がある。殿宇楼閣群は上下両所に分かれ、上院を俗に「新青蓮寺」、下院を「古青蓮寺」と称している。寺院周辺を眺望してみると、東方には「峿山」があって巨嶂列をなし、南望すれば「珏山、双峰」が連なっている。この山並の脚下には「丹水」が東北から西南へと流れ去ってゆく。上院の北面はといえば、「硤石山」の諸峰が空高くそびえ立ち、その様はまるで鬼神が斧をふるって岩壁を切りさいたかのようである。この地の山水は誠に麗しく一幅の墨絵を見ているようではある。北斉の時に寺院が創建されて以来、晋城上党地区の名勝といわれ、その景観の美しさと文化的意義は天下になり響いている。現在は全国重点文物保護単位となっている。ちなみに、寺外東南の二十米程の高台の上には「款月亭」があり、そこからは見事な景色が一望できる。毎年仲秋の頃ともなると游人雲集してこの境に酔うという。東南に月が登り峰々にその光をふり注ぐのを見て、古人は「珏山吐月」と絶賛したと聞く。早くよりこの地が晋城四大景観の筆頭に列せられたとしても当然のことといえよう。またこの亭の後方には「擲筆台」と称せられる地処がある。この地は世寿七十才にして長安「浄影寺」にその生涯を終えた「慧遠大師」ゆかりの場所である。北周隋初の高僧慧遠はここで『涅槃経疏』を書きあげたといわれるが、疏が完成した折、その筆を投げすてたときそれが空中に駐まったという伝説の地がここである。

さて寺院の沿革を述べることにする。敦煌出身にして後日上党高都（現在の晋城高平、陵川一帯）に居住していたとされる慧遠がここに道場を創設し説法や経典の注疏を行なったのは北斉天保年間（五五〇－五五九）のことであっ

たという。草創当時の寺名は「硤石寺」であった。唐貞元（七八五―八〇六）の時代にはここに「智通禅師」あって『六波羅蜜疏』をあらわし、太和初年（八二七）には「慧愔禅師」がここに到り、新たに殿宇を造成して法華道場を開辟するにいたってようやく寺院の様子がととのったという。今日の古青蓮寺（下院）の周りであろう。唐太和二年には僧徒も増大の一途をたどっており、施設拡充の必要にせまられて上院を創建するにいたったようである。現今の新青蓮寺の地域である。咸通八年（八六七）、下賜あって「青蓮寺」と称するようになったのである。寺名についてはその後北宋太平興国三年（九七八）に上院が賜をうけて「福巌禅院」となり、よって両寺は分立することとなったが、明代に再び青蓮寺と称するようになったため、その後古青蓮寺・青蓮寺の呼び名で今にいたっている。

古青蓮寺の隆盛時の規模は知るよしもないが、清乾隆十一年（一七四六）重修碑の記載によれば、当時なお正殿九間、南殿九間、東西禅堂各五間あったという。現在は正殿三間、南殿三間をわずかに残すだけであり、面積にして約六百平方米である。現在山腰を結ぶ小路をたどってこの寺院に到着すると上院に登る階段がまっている。上院の入口周辺は修築がなされているが、そこから南下すること五百米ほどの狭い平地にある下院は資材の搬送も難しいものか改修はおくれて荒廃がはなはだしい。そこでまず目をひくのは寺院東側にある「蔵式舎利塔（ラマ塔）」である。塔身にはめこまれた『青蓮古寺塔記』によれば、明の万暦二十四年（一五九六）建造のものである。塔高約二十米程ある。平地の東端に位置するこの塔は華美な装飾が一切なく、塔姿全体がスマートな宝瓶のようでいたって単純な美しさ



青蓮寺ラマ塔

を持っている。塔座は八角平面の須弥座。極端に小さくその幅は覆鉢部の最大径より小で、高さも一・五米程である。唯一この部分には上枋・上梟・束腰・下梟・下枋・圭角にわたって蓮弁・花紋等の浮彫（青石彫？）がみられるが、近年の修築か材料の色彩が他に比して灰色である。その上部はすべて土褐色の磚造と思われる。覆鉢部は下から数段目で一度内にくびれるがその上方は滑らかに円曲し、遠望すると上部で急に折れて肩をいからせたように見える。南方に向かって上円下方の小門が開かれている。また、西面下端に塔記がはめ込まれている。その上の「平頭」らしい形態ははっきりと見ることができず相輪部に連続しているようで、強いていえば相輪最下の二輪がいささか巨大といった感じである。最下層の一輪の直径が台座の幅に近似している。相輪は各輪かどが丸く、この二輪を合わせると十三あり徐々に小さくなって細長い円錐形をなす。その上は少し幅広の「輪蓋」一枚がしつらえられ宝瓶様のものがのっているが半壊していて形がよく解らず、木製の塔刹内芯らしきものが見えている。内部は見られないが、資料によると南門内には八角形の内室があり、北面に磚砌の仏壇があり二層に分かれている。前層に小型の泥塑臥仏があり、後層中心には泥塑観音立像と両脇阿難・迦葉像が配されているという。更に仏壇後方に六十八尊浮彫のほどこされた造像碑一幢があり、頂上石刻蓮華座に木刻光背を有する結跏趺坐釈迦像一尊が安置されている。いずれも明代の作と考えられ長期塔内に置かれながら保存状態は良いようである。ラマ塔は元代以降チベット方面から輸入され明末以降広く中国各地に建立されたらしく、僧侶の墓としてしばしば用いられたようだが、この塔についてはよく解らない。ただ晋城市域にあって現存唯一のものと聞く。

一方、殿宇の西側には唐代造建の「慧峰大師塔」がある。近年西方の石崖下の草むらから移築したものである。一九八六年丹河氾濫して崖下の台地が崩落せんとした折、現地へ移したらしい。最下層には八角平面の須弥座があり、その上に塔身の基座部がのる。その束腰は円形の坐蒲の如くであり側面八方に人形鳥等の浮彫がみられる。その上下層は宝装蓮花が刻されている。塔身は平面八角形で各隅には「束蓮柱（蓮根茎の柱）」が見られ、前面に方形の門が開き、後面には刻文が記されている。そこには「唐故先師和尚、

慧峰大師塔

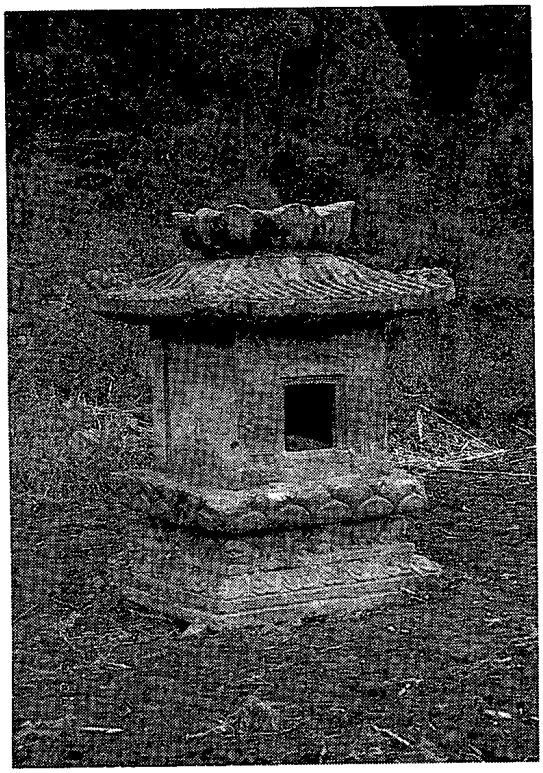
汝州襄城縣人也、俗姓賀蒲氏、法號慧峯。於中和戊申歳八月二十八日遷化去。乾寧乙卯年建造靈塔、十月功畢後記耳」とある。その上は、八角傘形の屋根（八面坡式）、請ヶ花と重なり、さらに覆鉢、宝瓶様の数層が乗せられている。塔高二、三米で彫刻は精緻。唐代末の石造建築物として稀少であるという。

四、高平県（開化寺・大愚禅師墓塔）

この寺は高平県城北十七キロ米、舎利山の山腰に位置する。峰々を巡る狭い山路を進むと松柏繁茂にする中に建築群が見えてくる。随分と荒廃しているが、入母屋式（歇山式）の「青混瓦」の屋根を頂く大雄宝殿や楼閣式山門等が現存している。殊に大雄殿内の梁架、斗栱の彩絵図案は宋代のもので、中国古代建築史上完成度も高く、保存状態も最良のものであるという。また同殿内の美しい墻壁画は北宋（一〇九六）の製作とされ、規模は面積にして八十八・二平方米にもなる。

開化寺の創建は五代後唐の同光年間（九二三―九二六）で初め「清凉寺」と称したようである。北宋熙寧六年（一〇七三）大雄殿建立の後、「開化禅院」と改名し、また開化寺といったのである。この寺の東南五百米程の山腹に平地があり、現在畑作が行なわれているようだが、その周りには、いくつかの墓塔が残されている。その中で最も大形で高さ二・九五米、幅一・五米程の四角一層塔が眼につく。塔は全体が石造で平面方形をなす。基壇はどっしりとしていて束腰には八方に獅子、それぞれの両脇に獅子使（訓獅者）らしき人物が刻されている。その上下に蓮弁が彫られているが、下層のものが小ぶりで造作が細かく、上層は巨

山西省の古塔（岡島）



大愚禅師塔

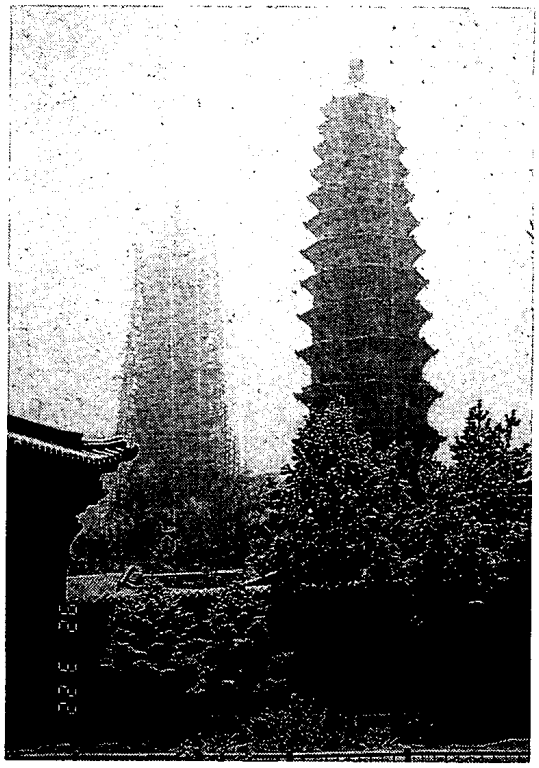
大な蓮弁が二段になっていて力強い。方形塔身の南面には単純な「尖拱額」を掲げる方形門が開けられている。また門の両側には守門力士各一尊が立ち、向かって右の者は剣を脚前に突きたて、左の力士は右手に戟を持っている。そして門の上方左右に二飛天も彫られている。これまた重量感のある屋頂はゆるやかな反りのある四角錐形（四坡式）で支那式木造建築を模した筒瓦と板瓦のうねが四方にのびている。四方の「隅降棟（垂脊）」の先端あたりには「垂獣」が刻されている。また軒下にはなお二軒（飛檐椽、地椽）が彫り出されているのを見る。その上にはアカントス葉の彫刻がされた大きな四角の請花がのっている。その上に伏鉢等は全く見られないが、以前はあったのではあるまいか。中国固有の「亭閣式塔」と言われるものの小形のものと思われる。唐代の様式を顕著に持つとされる河北省房山県雲居寺の小石塔のひとつが『支那の佛塔』（村田治郎著）に描出されているが、たいへん似ている。ここに叙する開元寺小石塔の塔身後壁には「禪師姓劉、法號大愚、潞城人也……同光三年歳次乙酉（九二五）辛卯建造」とあるから、五代後唐時の造塔で「大愚禅師塔」と呼ばれている。

五、太原市区（永祚寺・双塔）

この寺院は太原市東南城効の郝村南にある。明の万暦年間（一五七三―一六一九）に寺院と塔が建てられている。修建を主催したのは「佛澄」という僧人とされる。この人物は俗名を「李福」といい、平遙一帯で知られた泥瓦匠であり、亭台楼閣の修建に長じていたといわれる。造塔の次第に次のような説話が残されている。出家後も天賦の才の故に、建築模型などを造っていたという。その内に塑泥の

塔があってまことに精密であったのを、折しも寺を訪れた差人（役人）が看て驚嘆し、それが皇帝の知るところとなって造建のはこびとなったという。李福は八百名の工匠とともに一年の労苦を重ねて塔を完成させたが、いよいよ皇帝に献ずるに先立ち、特命役人（欽差）が来たって出来ばえを点検する前日になって突然天空かき曇って雷雨はげしくなり、一条の雷電閃めくや両塔壁中裂してしまった。それを見た役人は一夜にして改修到らざれば李福と工人の首を切ると言いわたした。この時一人の鍋なおしの修理人（鋸鍋匠）現われて、声高に商いの呼び声をあげるので工匠が塔を指してあれをなおせるかと聞くと彼はしばらくして修理を請負ったという。翌朝人々が起きてみると、塔頂に銅製の環がかぶせられて亀裂はなおされているのであった。よくよく見ると環に近い磚上に「皇帝に献ずるためにしたのではない。只兄弟を救わんがためなり」と刻されていたという。誰もが感激に涙したが、すでに修理人の姿はなかった。この人こそ工芸人の祖師と称される「魯班」だったというのである。この話の真偽はともかく、今もこの双塔は寺域の南東の一段高い平地に立っている。訪問時はあいにくの雪で、しかも一塔が大改築中であったが、可能な限りその状況を記すことにする。

「文宣塔」とも呼ばれるこの双塔は高さが五十四・七米の楼閣式磚塔である。形は八角十三層の長大なものである。我々は北面から入ったようで、両塔の間には東西壁に横ならびするアーチ式門窓を配した「円山式（大棟付近が馬の鞍のように丸い）歇山（入母屋）」の屋根を持つ平屋が建っている。東塔は大改修中、その東にはもう一つ二階建の建築物があった。西塔を見ると、方形の基壇上に丈高の基



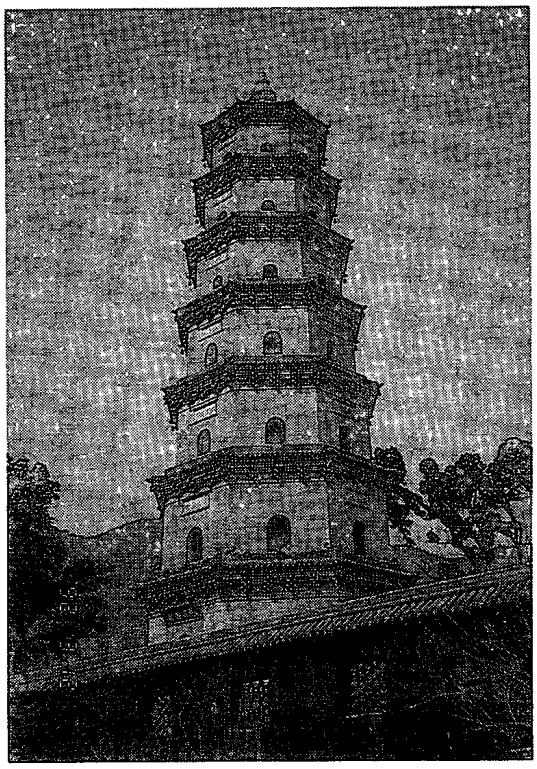
永祚寺双塔

層があり、東面にアーチ式の門が開かれている。門の内は以外に狭いが正面に龕がある。その右方に階段がありラセン状に最上層まで登れるようである。西面の門は今閉ざされており、その上方に額がはめられている。基層軒下には各面三組の二手先斗栱が精巧に刻されており、また隅行部分では肘木・木鼻様のものが放射状に三段造られている。さらに斗栱間には「宣文佛塔」「阿弥陀佛」の文字が彫り出されている。その下には台輪があり隅でいずれも交叉突出している。加えて八方隅には比較的短く太い「垂花柱」があってその左右には「雀替」が鮮かに刻まれている。斗栱組物の上には二軒が積み出され隅行には風鈴がついている。軒上は琉璃瓦が葺かれ、垂獣らしきものが八隅に配されている。上部各層も類似した構造であるが、文字と垂花柱の彫刻がなく、アーチ式の門が八方に開いている点が異なる。改修中の塔も構造はほぼ同様と思われる。ただし、塔頂の宝瓶は少し形が違う。丸味を帯びた八角形の屋頂に白熱電球を逆さにしたような形態を呈する西塔に対し、東塔塔刹には三つにくびれた団子形が上にゆくほど直径を減じて積み重ねられているようである。この双塔は太原の象徴であり、現存する中国双塔のうち最高最大のものといわれる。それ故に永祚寺は民間に双塔寺と称されている。

おわりに

今回の実地調査においては、他に太原市晋祠の「舎利生生塔（奉経寺塔）」を見た。塔高三十米、八角七級の多層塔で十層まで登れるという。檐は青瓦がのる。

また、交城県西北部の卦山にある「天寧万寿禅寺」には「塔林」が存し、陀羅尼経幢に類似した「幢式塔（墓塔）」



舎利生生塔

天寧寺幢式塔

が見られた。その内では大元至元三年（一三三七）の年代が確かめられたものが古い。かつては唐代の「華厳経塔」もあったという。さらに寺域から彼方の山上に塔が遠望でき、「華厳塔」と聞いたが行くことができなかった。これらの文物に関して報告できなかったことが残念であった。

最後に、山西省は中国屈指の古塔の宝庫といわれる。本調査では期間の制約もあり、そのごく一部にしかふれられなかったわけだが、南部地域の報告をなしえたことは幸いであった。また、本調査にご同行頂き、適切なるご教示と絶大なるご高配を賜わった丁明夷、崔正森先生はじめ、多くの関係諸氏に敬意をこめて深く感謝申し上げたい。

参考文献

一、扈石祥編著『廣勝寺誌』（中央民族学院出版社、一九八八）
二、山西省古建築保護研究所編『広勝寺』（文物出版社、一九八五）
三、薛榮哲主編『澤州古代文化薈萃』（経済日報出版社、一九八九）
四、解光啓著『卦山』（山西人民出版社、一九九〇）
五、李承凱　李嘉龍編著『古塔』（上海古籍出版社、一九九三）
六、文化部文物保護科研所主編『中国古建築修繕技術』（中国建築工業出版社、一九八三）
七、梁思成　英文原著『図像中国建築史』〔漢英双語版〕（中国建築工業出版社、一九八四）
八、村田治郎著『支那の佛塔』（冨山房　一九四〇）